

## § 7-1 (a) 最小2乗法 (1)

一組の変量  $(x, y)$  について  $n$  個の観測点  $(x_i, y_i)$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) があるとき、これらの観測点を最もよく表していると思われる関数  $y(x)$  をつくることを考える。

(a) 原点を通る1次関数

$n$  個の観測点  $(x_i, y_i)$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) を原点を通る1次関数

$$y = a_1 x \quad (1)$$

で近似することを考える。

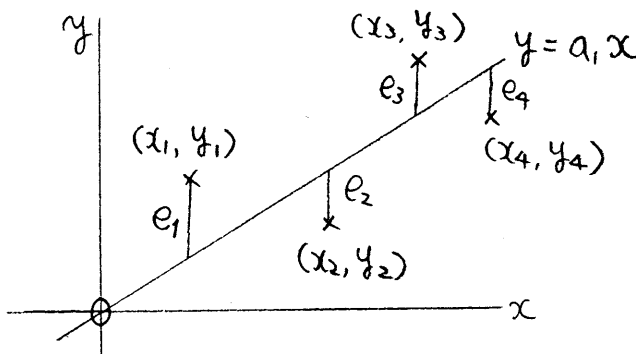
(1) 式と観測値  $y_i$  との差 (残差) を  $e_i$  とすると

$$e_i = y_i - a_1 x_i \quad (2)$$

となる。ここで残差の2乗和を  $f$  とすると、

$$f = \sum_{i=1}^m e_i^2 = \sum_{i=1}^m \{y_i - a_1 x_i\}^2 \quad (3)$$

となる。 $f$  を最小にするような  $a_1$  を決定すれば、その直線が与えられた観測点のデータを最もよく表している直線であると考えられることができる (下図参照)。



(3) 式を  $a_1$  について微分すると、

$$\frac{\partial f}{\partial a_1} = -2 \sum_{i=1}^m (x_i y_i - a_1 x_i^2) = 0 \quad (\text{極値の条件}) \quad (4)$$

となる。これから

$$\sum_{i=1}^m x_i y_i = a_1 \sum_{i=1}^m x_i^2 \quad \therefore a_1 = \frac{\sum_{i=1}^m x_i y_i}{\sum_{i=1}^m x_i^2} \quad (5)$$

となる。観測データの最もよく合う原点を通る1次関数の傾きをこのようにして決めるこ

とができる。このような方法を最小自乗法という。

(b) 原点を通らない1次関数

n個の観測点  $(x_i, y_i)$  ( $i=1, 2, \dots, n$ ) を原点を通らない1次関数

$$y = a_0 + a_1 x \quad (6)$$

で近似することを考える。

(6) 式と観測値  $y_i$  との差 (残差)  $e_i$  は、

$$e_i = y_i - (a_0 + a_1 x_i) \quad (7)$$

となる。残差の2乗和  $f$  は、

$$f = \sum_{i=1}^n e_i^2 = \sum_{i=1}^n \{y_i - (a_0 + a_1 x_i)\}^2 \quad (8)$$

となる。 $f$  を最小にするような  $a_0, a_1$  は、 $f$  の  $a_0, a_1$  のよる偏微分がゼロという条件から定まる。すなわち、

$$\begin{cases} \frac{\partial f}{\partial a_0} = -2 \sum_{i=1}^n \{y_i - (a_0 + a_1 x_i)\} = 0 \\ \frac{\partial f}{\partial a_1} = -2 \sum_{i=1}^n \{y_i - (a_0 + a_1 x_i)\} x_i = 0 \end{cases}$$

すなわち、

$$\begin{cases} \sum_{i=1}^n y_i = a_0 \sum_{i=1}^n 1 + a_1 \sum_{i=1}^n x_i \\ \sum_{i=1}^n y_i x_i = a_0 \sum_{i=1}^n x_i + a_1 \sum_{i=1}^n x_i^2 \end{cases} \quad (9)$$

ここで、

$$\sum_{i=1}^n y_i = T_0, \quad \sum_{i=1}^n y_i x_i = T_1, \quad (10)$$

$$\sum_{i=1}^n 1 = S_0, \quad \sum_{i=1}^n x_i = S_1, \quad \sum_{i=1}^n x_i^2 = S_2$$

とおけば、(9) 式は

$$\begin{pmatrix} S_0 & S_1 \\ S_1 & S_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a_0 \\ a_1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} T_0 \\ T_1 \end{pmatrix}$$

となる。

$$\therefore a_0 = \frac{T_0 S_2 - T_1 S_1}{n S_2 - S_1^2}, \quad a_1 = \frac{n T_1 - T_0 S_1}{n S_2 - S_1^2} \quad (11)$$

(c) m次関数

n個の観測点  $(x_i, y_i)$  ( $i=1, 2, \dots, n$ ) をm次関数

$$y = a_0 + a_1 x + a_2 x^2 + \dots + a_m x^m \quad (12)$$

で近似することを考える。

(12)式と観測値  $y_i$  との差 (残差)  $e_i$  は、

$$e_i = y_i - \sum_{j=0}^m a_j x_i^j \quad (13)$$

となる。残差の2乗和  $f$  は、

$$f = \sum_{i=1}^n e_i^2 = \sum_{i=1}^n \left\{ y_i - \sum_{j=0}^m a_j x_i^j \right\}^2 \quad (14)$$

となる。  $f$  の  $a_k$  による偏微分がゼロという条件は、

$$\frac{\partial f}{\partial a_k} = -2 \sum_{i=1}^n \left[ \left\{ y_i - \sum_{j=0}^m a_j x_i^j \right\} x_i^k \right] = 0, \quad (k=0, 1, \dots, m)$$

すなわち、

$$\sum_{i=1}^n y_i x_i^k = a_0 \sum_{i=1}^n x_i^k + a_1 \sum_{i=1}^n x_i^{k+1} + \dots + a_m \sum_{i=1}^n x_i^{k+m} \quad (15)$$

ここで、

$$\sum_{i=1}^n y_i x_i^k = T_k, \quad \sum_{i=1}^n x_i^k = S_k \quad (16)$$

とおけば、(15)式は

$$\sum_{j=0}^m a_j S_{k+j} = T_k \quad (k=0, 1, \dots, m) \quad (17)$$

となる。これは  $(m+1)$  元の連立1次方程式

$$\begin{bmatrix} S_0 & S_1 & S_2 & \dots & S_m \\ S_1 & S_2 & S_3 & \dots & S_{m+1} \\ \vdots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ S_m & S_{m+1} & S_{m+2} & \dots & S_{2m} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} a_0 \\ a_1 \\ \vdots \\ a_m \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} T_0 \\ T_1 \\ \vdots \\ T_m \end{bmatrix} \quad (18)$$

である。これを解けば、(12)式の各項の係数が求められる。

連立1次方程式の解は例えばクラメルの公式

$$\begin{pmatrix} a_{11} & \dots & a_{1n} \\ \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & \dots & a_{nn} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} b_1 \\ \vdots \\ b_n \end{pmatrix} \quad \text{の解は、}$$

$$x_j = \frac{|A_j|}{|A|} = \frac{\begin{vmatrix} a_{11} & \dots & b_1 & \dots & a_{1n} \\ a_{21} & \dots & b_2 & \dots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & \dots & b_n & \dots & a_{nn} \end{vmatrix}}{\begin{vmatrix} a_{11} & \dots & a_{1j} & \dots & a_{1n} \\ a_{21} & \dots & a_{2j} & \dots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & \dots & a_{nj} & \dots & a_{nn} \end{vmatrix}} \quad (19)$$

(Cramer's formula)

のよって求めることができる。高次の行列式を計算するには、そのための数値計算法（この授業では取り上げない）を知る必要があるが、少なくとも3次の行列式くらいであれば、行列式を展開してもそれほど複雑な式にはならない：

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{vmatrix} = a_{11} \begin{vmatrix} a_{22} & a_{23} \\ a_{32} & a_{33} \end{vmatrix} - a_{12} \begin{vmatrix} a_{21} & a_{23} \\ a_{31} & a_{33} \end{vmatrix} + a_{13} \begin{vmatrix} a_{21} & a_{22} \\ a_{31} & a_{32} \end{vmatrix} \quad (20)$$

従って、われわれは2次式への最小2乗フィッティング（3次の行列式の計算が必要）は行うことができるはずである。

今後各種の実験データの処理に際しては、目測によって直線（ないし曲線）をひくのではなく、最小2乗法によって線をひくこと。

#### ※問題 29

フロッピーディスク上のN個のデータ  $(x_i, y_i)$  ( $i = 1, 2, \dots, N$ ) のデータを読み込み、（原点を通らない）1次関数に最小2乗法でフィッティングするプログラムを作成せよ。ファイル入出力のやり方は § 5 を参照のこと。

#### 【プログラム例】

```

PROGRAM MON29
IMPLICIT REAL*8(A-H,O-Z),INTEGER*4(I-N)
DIMENSION X(100),Y(100)
CHARACTER*15 IFLI
WRITE(6,101)
101 FORMAT(3X,' INPUT FILE NAME FOR DATA' )
READ(5,102) IFLI
102 FORMAT(A15)
C
OPEN(1,FILE=IFLI)
C
WRITE(6,103)
103 FORMAT(3X,' INPUT THE NUMBER OF DATA POINTS' )
READ(5,*) N
PN=FLOAT(N)

```

C

```

DO 100 I=1,N
  READ(1,*) X(I),Y(I)
100 CONTINUE
  XSUM=0.0
  YSUM=0.0
  DO 200 I=1,N
    XSUM=XSUM+X(I)
    YSUM=YSUM+Y(I)
200 CONTINUE
  XAV=XSUM/PN
  YAV=YSUM/PN
  DO 300 I=1,N
    SX=SX+(X(I)-XAV)**2
    SXY=SXY+(X(I)-XAV)*(Y(I)-YAV)
300 CONTINUE
  A=SXY/SX
  B=YAV-A*XAV
  WRITE(6,301) A,B
301 FORMAT(3X,'A = ',E12.5,3X,'B = ',E12.5)
  CLOSE(1)
END

```

(11)式と等価な式:

$$\bar{x} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i, \quad \bar{y} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n y_i$$

$$S_x = \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2, \quad S_{xy} = \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})$$

$$a = S_{xy} / S_x, \quad b = \bar{y} - a\bar{x}$$

この a, b が fitした直線  $y = ax + b$  の係数となる。

この部分のもともなる式は  
 このプログラムでは (11) 式ではなく  
 (11) 式と等価な式を使っている。  
 このやり方が正しいことと確認する  
 するまでは (11) 式を使って  
プログラミングすること!

※問題 3 0

問題 2 9 で作成したプログラムを用いて、次の表のデータを直線で近似せよ。まず、次表の数値をフロッピーディスク上のファイルに (エディターを使って) 書き、数値をプログラムを走らせるときに読み込ませよ。

|   |        |        |        |        |        |        |
|---|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| x | 0.0    | 0.1    | 0.2    | 0.3    | 0.4    | 0.5    |
| y | 1.0000 | 1.2589 | 1.5849 | 1.9953 | 2.5119 | 3.1623 |

※問題 3 1

フロッピーディスク上の N 個のデータ  $(x_i, y_i)$  ( $i = 1, 2, \dots, N$ ) のデータを読み込み、2 次関数に最小 2 乗法でフィッティングするプログラムを作成せよ。

※問題 3 2

問題 3 0 のデータを問題 3 1 で作成したプログラムを用いて、2 次関数で近似せよ。

※問題 3 3

問題 3 1 で作成したプログラムを用いて、次の表のデータを 2 次関数で近似せよ。まず、次表の数値をフロッピーディスク上のファイルに（エディターを使って）書き、数値をプログラムを走らせるときに読み込ませよ。

|   |      |      |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|---|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| x | 0    | 100  | 200   | 300   | 400   | 500   | 600   | 700   | 800   | 900   | 1000  |
| y | 8.24 | 9.40 | 10.70 | 12.15 | 13.40 | 14.60 | 15.65 | 16.60 | 17.40 | 18.23 | 18.93 |

§ 7 - 1 (b) 最小 2 乗法 (2)

n 個の観測点  $(x_i, y_i)$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) を、m 次関数

$$y = a_0 + a_1 x + a_2 x^2 + \dots + a_m x^m \quad (1)$$

へ最小 2 乗法によってフィッティングをすると、各項の最適化された係数は、連立一次方程式

$$\begin{pmatrix} S_0 & S_1 & S_2 & \dots & S_m \\ S_1 & S_2 & S_3 & \dots & S_{m+1} \\ \vdots & & & & \vdots \\ S_m & S_{m+1} & S_{m+2} & \dots & S_{2m} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a_0 \\ a_1 \\ \vdots \\ a_m \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} T_0 \\ T_1 \\ \vdots \\ T_m \end{pmatrix} \quad (2)$$

の解  $a_0, a_1, \dots, a_m$  として与えられる。ここで、

$$S_k = \sum_{i=1}^n x_i^k \quad (3)$$

$$T_k = \sum_{i=1}^n y_i x_i^k$$

である。

一般に、m 元連立一次方程式

$$\begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \dots & a_{1m} \\ a_{21} & a_{22} & \dots & a_{2m} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \dots & a_{mm} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_m \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_m \end{pmatrix} \quad (4)$$

の解  $x_1, x_2, \dots, x_m$  は、クラメルの公式

$$x_j = \frac{\begin{array}{c} \begin{array}{c} a_{11} \dots b_1 \dots a_{1m} \\ a_{21} \dots b_2 \dots a_{2m} \\ \vdots \\ a_{m1} \dots b_m \dots a_{mm} \end{array} \\ \hline \begin{array}{c} a_{11} \dots a_{1j} \dots a_{1m} \\ a_{21} \dots a_{2j} \dots a_{2m} \\ \vdots \\ a_{m1} \dots a_{mj} \dots a_{mm} \end{array} \end{array}}{\quad} \quad (j = 1, 2, \dots, m) \quad (5)$$

第j列

によって与えられる。この公式を使えば、(2)式は解ける(m次関数へのフィットは(m+1)次の行列式を使うことになる)。ただし、クラメルの公式は4次の行列式くらいが実際にプログラミングできる限界であろう。それより多元の連立1次方程式の解は、行列の対角化によって解くべきである。行列の対角化にはいくつかのアルゴリズムがあるが授業ではとりあげない。

例：

(1) 1次関数

$$y = a_0 + a_1 x$$

へのフィットは、連立一次方程式

$$\begin{pmatrix} S_0 & S_1 \\ S_1 & S_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a_0 \\ a_1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} T_0 \\ T_1 \end{pmatrix}$$

を解けばよい。解はクラメルの公式

$$a_0 = \frac{\begin{vmatrix} T_0 & S_1 \\ T_1 & S_2 \end{vmatrix}}{\begin{vmatrix} S_0 & S_1 \\ S_1 & S_2 \end{vmatrix}}, \quad a_1 = \frac{\begin{vmatrix} S_0 & T_0 \\ S_1 & T_1 \end{vmatrix}}{\begin{vmatrix} S_0 & S_1 \\ S_1 & S_2 \end{vmatrix}}$$

によって与えられる。

【プログラム例】

```

PROGRAM MON29A
IMPLICIT REAL*8(A-H,O-Z),INTEGER*4(I-N)
DIMENSION X(100),Y(100)
CHARACTER*15 IFLI
WRITE(6,101)
101 FORMAT(3X,'INPUT FILE NAME FOR DATA')
READ(5,102) IFLI
102 FORMAT(A15)
C
OPEN(1,FILE=IFLI)
C
WRITE(6,103)
103 FORMAT(3X,'INPUT THE NUMBER OF DATA POINTS')
READ(5,*) N

```

PN=FLOAT(N)

C

```

DO 100 I=1,N
READ(1,*) X(I),Y(I)
100 CONTINUE

```

C

```

S0=PN
S1=0.0
S2=0.0
T0=0.0
T1=0.0
DO 200 I=1,N
S1=S1+X(I)
S2=S2+X(I)**2
T0=T0+Y(I)
T1=T1+Y(I)*X(I)
200 CONTINUE

```

.....  $S_0 = n$

.....  $S_1 = \sum x_i$   
.....  $S_2 = \sum x_i^2$   
.....  $T_0 = \sum y_i$   
.....  $T_1 = \sum y_i x_i$

C

```

DD=S0*S2-S1**2
DD0=T0*S2-T1*S1
DD1=S0*T1-S1*T0
A0=DD0/DD
A1=DD1/DD

```

.....  $a_0$   
.....  $a_1$

$$\begin{vmatrix} S_0 & S_1 \\ S_1 & S_2 \end{vmatrix} \quad \begin{vmatrix} T_0 & S_1 \\ T_1 & S_2 \end{vmatrix} \quad \begin{vmatrix} S_0 & T_0 \\ S_1 & T_1 \end{vmatrix}$$

C

```

WRITE(6,301) A0,A1
301 FORMAT(3X,'A0 = ',E12.5,3X,'A1 = ',E12.5)
CLOSE(1)
END

```

(2) 2次関数

$y = a_0 + a_1 x + a_2 x^2$

へのフィットは、連立一次方程式

$$\begin{pmatrix} S_0 & S_1 & S_2 \\ S_1 & S_2 & S_3 \\ S_2 & S_3 & S_4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a_0 \\ a_1 \\ a_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} T_0 \\ T_1 \\ T_2 \end{pmatrix}$$

を解けばよい。解はクラメルの公式

$$a_0 = \frac{\Delta_0}{\Delta}, \quad a_1 = \frac{\Delta_1}{\Delta}, \quad a_2 = \frac{\Delta_2}{\Delta},$$

ここで

$$\Delta = \begin{vmatrix} S_0 & S_1 & S_2 \\ S_1 & S_2 & S_3 \\ S_2 & S_3 & S_4 \end{vmatrix}, \quad \Delta_0 = \begin{vmatrix} T_0 & S_1 & S_2 \\ T_1 & S_2 & S_3 \\ T_2 & S_3 & S_4 \end{vmatrix}$$

$$\Delta_1 = \begin{vmatrix} S_0 & T_0 & S_2 \\ S_1 & T_1 & S_3 \\ S_2 & T_2 & S_4 \end{vmatrix}, \quad \Delta_2 = \begin{vmatrix} S_0 & S_1 & T_0 \\ S_1 & S_2 & T_1 \\ S_2 & S_3 & T_2 \end{vmatrix}$$



によって与えられる。この式にでてくる3次の行列式を展開すると、

$$\Delta = S_0 \begin{vmatrix} S_2 & S_3 \\ S_3 & S_4 \end{vmatrix} - S_1 \begin{vmatrix} S_1 & S_3 \\ S_2 & S_4 \end{vmatrix} + S_2 \begin{vmatrix} S_1 & S_2 \\ S_2 & S_3 \end{vmatrix}$$

$$\Delta_0 = T_0 \begin{vmatrix} S_2 & S_3 \\ S_3 & S_4 \end{vmatrix} - S_1 \begin{vmatrix} T_1 & S_3 \\ T_2 & S_4 \end{vmatrix} + S_2 \begin{vmatrix} T_1 & S_2 \\ T_2 & S_3 \end{vmatrix}$$

$$\Delta_1 = S_0 \begin{vmatrix} T_1 & S_3 \\ T_2 & S_4 \end{vmatrix} - T_0 \begin{vmatrix} S_1 & S_3 \\ S_2 & S_4 \end{vmatrix} + S_2 \begin{vmatrix} S_1 & T_1 \\ S_2 & T_2 \end{vmatrix}$$

$$\Delta_2 = S_0 \begin{vmatrix} S_2 & T_1 \\ S_3 & T_2 \end{vmatrix} - S_1 \begin{vmatrix} S_1 & T_1 \\ S_2 & T_2 \end{vmatrix} + T_0 \begin{vmatrix} S_1 & S_2 \\ S_2 & S_3 \end{vmatrix}$$

のようになる。

【プログラム例】

```

PROGRAM MON31
  IMPLICIT REAL*8(A-H,O-Z), INTEGER*4(I-N)
  DIMENSION X(100),Y(100)
  CHARACTER*15 IFLI
  WRITE(6,101)
101 FORMAT(3X,'INPUT FILE NAME FOR DATA')
  READ(5,102) IFLI
102 FORMAT(A15)
C
  OPEN(1,FILE=IFLI)
C
  WRITE(6,103)
103 FORMAT(3X,'INPUT THE NUMBER OF DATA POINTS')
  READ(5,*) N
  PN=FLOAT(N)
C
  DO 100 I=1,N
  READ(1,*) X(I),Y(I)
100 CONTINUE
C
  S0=PN
  S1=0.0
  S2=0.0
  S3=0.0
  S4=0.0
  T0=0.0
  T1=0.0
  T2=0.0
  DO 200 I=1,N
  S1=S1+X(I)
  S2=S2+X(I)**2
  S3=S3+X(I)**3
  S4=S4+X(I)**4
  T0=T0+Y(I)
  T1=T1+Y(I)*X(I)
  T2=T2+Y(I)*X(I)**2
200 CONTINUE
C

```

$$S_0 = n$$

$$\begin{aligned}
 S_1 &= \sum x_i \\
 S_2 &= \sum x_i^2 \\
 S_3 &= \sum x_i^3 \\
 S_4 &= \sum x_i^4
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 T_0 &= \sum y_i \\
 T_1 &= \sum y_i x_i \\
 T_2 &= \sum y_i x_i^2
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
D &= S_0*(S_2*S_4 - S_3**2) - S_1*(S_1*S_4 - S_2*S_3) + S_2*(S_1*S_3 - S_2**2) \\
D_1 &= T_0*(S_2*S_4 - S_3**2) - S_1*(T_1*S_4 - T_2*S_3) + S_2*(T_1*S_3 - T_2*S_2) \\
D_2 &= S_0*(T_1*S_4 - T_2*S_3) - T_0*(S_1*S_4 - S_2*S_3) + S_2*(S_1*T_2 - S_2*T_1) \\
D_3 &= S_0*(S_2*T_2 - S_3*T_1) - S_1*(S_1*T_2 - S_2*T_1) + T_0*(S_1*S_3 - S_2**2)
\end{aligned}$$

$\Delta$   
 $\Delta_0$   
 $\Delta_1$   
 $\Delta_2$

C

$$\begin{aligned}
A_0 &= D_1/D \\
A_1 &= D_2/D \\
A_2 &= D_3/D
\end{aligned}$$

C

```

WRITE(6,301) A0,A1,A2
301 FORMAT(3X,'A0 = ',E12.5,2X,'A1 = ',E12.5,2X,'A2 = ',E12.5)
CLOSE(1)
END

```

(2) 3次関数

$$y = a_0 + a_1x + a_2x^2 + a_3x^3$$

へのフィットは、4元連立一次方程式

$$\begin{pmatrix}
S_0 & S_1 & S_2 & S_3 \\
S_1 & S_2 & S_3 & S_4 \\
S_2 & S_3 & S_4 & S_5 \\
S_3 & S_4 & S_5 & S_6
\end{pmatrix}
\begin{pmatrix}
a_0 \\
a_1 \\
a_2 \\
a_3
\end{pmatrix}
=
\begin{pmatrix}
T_0 \\
T_1 \\
T_2 \\
T_3
\end{pmatrix}$$

を解けばよい。解はクラメルの公式

$$a_0 = \Delta_0/\Delta, \quad a_1 = \Delta_1/\Delta, \quad a_2 = \Delta_2/\Delta, \quad a_3 = \Delta_3/\Delta$$

ここで、

$$\Delta = \begin{vmatrix} S_0 & S_1 & S_2 & S_3 \\ S_1 & S_2 & S_3 & S_4 \\ S_2 & S_3 & S_4 & S_5 \\ S_3 & S_4 & S_5 & S_6 \end{vmatrix}, \quad \Delta_0 = \begin{vmatrix} T_0 & S_1 & S_2 & S_3 \\ T_1 & S_2 & S_3 & S_4 \\ T_2 & S_3 & S_4 & S_5 \\ T_3 & S_4 & S_5 & S_6 \end{vmatrix}, \quad \Delta_1 = \begin{vmatrix} S_0 & T_0 & S_2 & S_3 \\ S_1 & T_1 & S_3 & S_4 \\ S_2 & T_2 & S_4 & S_5 \\ S_3 & T_3 & S_5 & S_6 \end{vmatrix}, \quad \Delta_2 = \begin{vmatrix} S_0 & S_1 & T_0 & S_3 \\ S_1 & S_2 & T_1 & S_4 \\ S_2 & S_3 & T_2 & S_5 \\ S_3 & S_4 & T_3 & S_6 \end{vmatrix}, \quad \Delta_3 = \begin{vmatrix} S_0 & S_1 & S_2 & T_0 \\ S_1 & S_2 & S_3 & T_1 \\ S_2 & S_3 & S_4 & T_2 \\ S_3 & S_4 & S_5 & T_3 \end{vmatrix}$$

によって与えられる。一般に、4次の行列式を展開すると、

$$\begin{aligned}
D &= \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} & a_{14} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} & a_{24} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} & a_{34} \\ a_{41} & a_{42} & a_{43} & a_{44} \end{vmatrix} \\
&= a_{11} \begin{vmatrix} a_{22} & a_{23} & a_{24} \\ a_{32} & a_{33} & a_{34} \\ a_{42} & a_{43} & a_{44} \end{vmatrix} - a_{12} \begin{vmatrix} a_{21} & a_{23} & a_{24} \\ a_{31} & a_{33} & a_{34} \\ a_{41} & a_{43} & a_{44} \end{vmatrix} + a_{13} \begin{vmatrix} a_{21} & a_{22} & a_{24} \\ a_{31} & a_{32} & a_{34} \\ a_{41} & a_{42} & a_{44} \end{vmatrix} - a_{14} \begin{vmatrix} a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \\ a_{41} & a_{42} & a_{43} \end{vmatrix} \\
&= D_1 - D_2 + D_3 - D_4
\end{aligned}$$

$$D_1 = a_{11} \left\{ a_{22} \begin{vmatrix} a_{33} & a_{34} \\ a_{43} & a_{44} \end{vmatrix} - a_{23} \begin{vmatrix} a_{32} & a_{34} \\ a_{42} & a_{44} \end{vmatrix} + a_{24} \begin{vmatrix} a_{32} & a_{33} \\ a_{42} & a_{43} \end{vmatrix} \right\}$$

$$D_2 = a_{12} \left\{ a_{21} \begin{vmatrix} a_{33} & a_{34} \\ a_{43} & a_{44} \end{vmatrix} - a_{23} \begin{vmatrix} a_{31} & a_{34} \\ a_{41} & a_{44} \end{vmatrix} + a_{24} \begin{vmatrix} a_{31} & a_{33} \\ a_{41} & a_{43} \end{vmatrix} \right\}$$

$$D_3 = a_{13} \left\{ a_{21} \begin{vmatrix} a_{32} & a_{34} \\ a_{42} & a_{44} \end{vmatrix} - a_{22} \begin{vmatrix} a_{31} & a_{34} \\ a_{41} & a_{44} \end{vmatrix} + a_{24} \begin{vmatrix} a_{31} & a_{32} \\ a_{41} & a_{42} \end{vmatrix} \right\}$$

$$D_4 = a_{14} \left\{ a_{21} \begin{vmatrix} a_{32} & a_{33} \\ a_{42} & a_{43} \end{vmatrix} - a_{22} \begin{vmatrix} a_{31} & a_{33} \\ a_{41} & a_{43} \end{vmatrix} + a_{23} \begin{vmatrix} a_{31} & a_{32} \\ a_{41} & a_{42} \end{vmatrix} \right\}$$

のようになる。

【プログラム例】

```

PROGRAM LST3
C***** LEAST SQUARE FITTING 3RD ORDER *****
  IMPLICIT REAL*8(A-H,O-Z), INTEGER*4(I-N)
  DIMENSION X(100),Y(100)
  CHARACTER*15 IFLI
  WRITE(6,101)
101 FORMAT(3X,'INPUT FILE NAME FOR DATA')
  READ(5,102) IFLI
102 FORMAT(A15)
C
  OPEN(1,FILE=IFLI)
C
  WRITE(6,103)
103 FORMAT(3X,'INPUT THE NUMBER OF DATA POINTS')
  READ(5,*) N
  PN=FLOAT(N)
C
  DO 100 I=1,N
  READ(1,*) X(I),Y(I)
100 CONTINUE
C
  S0=PN
  S1=0.0
  S2=0.0
  S3=0.0
  S4=0.0
  S5=0.0
  S6=0.0
  T0=0.0
  T1=0.0
  T2=0.0
  T3=0.0
  DO 200 I=1,N
  S1=S1+X(I)
  S2=S2+X(I)**2
  S3=S3+X(I)**3
  S4=S4+X(I)**4
  S5=S5+X(I)**5
  S6=S6+X(I)**6

```

$$S_0 = n$$

$$S_1 = \sum x_i$$

$$S_2 = \sum x_i^2$$

$$S_3 = \sum x_i^3$$

$$\vdots$$

$$S_6 = \sum x_i^6$$

T0=T0+Y(I)  
 T1=T1+Y(I)\*X(I)  
 T2=T2+Y(I)\*X(I)\*\*2  
 T3=T3+Y(I)\*X(I)\*\*3

$$T_0 = \sum y_i$$

$$T_1 = \sum y_i x_i$$

$$T_3 = \sum y_i x_i^3$$

200 CONTINUE

C

DO 300 I=1,5  
 A11=S0  
 A12=S1  
 A13=S2  
 A14=S3  
 A21=S1  
 A22=S2  
 A23=S3  
 A24=S4  
 A31=S2  
 A32=S3  
 A33=S4  
 A34=S5  
 A41=S3  
 A42=S4  
 A43=S5  
 A44=S6

$$\begin{pmatrix} S_0 & S_1 & S_2 & S_3 \\ S_1 & S_2 & S_3 & S_4 \\ S_2 & S_3 & S_4 & S_5 \\ S_3 & S_4 & S_5 & S_6 \end{pmatrix}$$

C

IF (I.EQ.2) THEN  
 A11=T0  
 A21=T1  
 A31=T2  
 A41=T3  
 END IF  
 IF (I.EQ.3) THEN  
 A12=T0  
 A22=T1  
 A32=T2  
 A42=T3  
 END IF  
 IF (I.EQ.4) THEN  
 A13=T0  
 A23=T1  
 A33=T2  
 A43=T3  
 END IF  
 IF (I.EQ.5) THEN  
 A14=T0  
 A24=T1  
 A34=T2  
 A44=T3  
 END IF

... 第1列  $\begin{pmatrix} T_0 \\ T_1 \\ T_2 \\ T_3 \end{pmatrix}$  替换

... 第2列 "

... 第3列 "

... 第4列 "

C

D1=A11\*(A22\*(A33\*A44-A43\*A34)-A23\*(A32\*A44-A42\*A34))  
 \* +A24\*(A32\*A43-A42\*A33)) : D1  
 D2=A12\*(A21\*(A33\*A44-A43\*A34)-A23\*(A31\*A44-A41\*A34))  
 \* +A24\*(A31\*A43-A41\*A33)) : D2  
 D3=A13\*(A21\*(A32\*A44-A42\*A34)-A22\*(A31\*A44-A41\*A34))  
 \* +A24\*(A31\*A42-A41\*A32)) : D3  
 D4=A14\*(A21\*(A32\*A43-A42\*A33)-A22\*(A31\*A43-A41\*A33))  
 \* +A23\*(A31\*A42-A41\*A32)) : D4  
 D=D1-D2+D3-D4 : D

C

※問題 3 4

塩化リチウム結晶のエンタルピーを測定したところ、次表のようなデータが得られた。

熱力学的関係式

$$C_p = \left( \frac{\partial H}{\partial T} \right)_p$$

を用いて、この物質の熱容量を S I 単位系で求めよ (この温度範囲で熱容量は一定と仮定せよ)。

|                         |        |        |        |        |        |        |
|-------------------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| T / K                   | 300    | 400    | 500    | 600    | 700    | 800    |
| H / kJmol <sup>-1</sup> | -413.5 | -410.8 | -408.1 | -405.4 | -402.5 | -399.6 |

※問題 3 5

300 K の塩化リチウム結晶に静水圧をかけて圧縮したところ、圧力に対して体積が次表のように観測された。熱力学的関係式

$$\kappa = - \frac{1}{V} \left( \frac{\partial V}{\partial P} \right)_T$$

を用いて、この物質の等温圧縮率  $\kappa$  を S I 単位系で求めよ。

この圧力範囲で  $(\partial V / \partial P)_T$  は一定と仮定せよ。

|                                       |       |      |      |      |      |
|---------------------------------------|-------|------|------|------|------|
| P / GPa                               | 0.1   | 1.0  | 2.0  | 3.0  | 5.0  |
| V / cm <sup>3</sup> mol <sup>-1</sup> | 10.23 | 9.94 | 9.65 | 9.41 | 9.01 |

※問題 3 6

熔融塩化リチウムの密度を測定したところ、次表のようなデータが得られた。これを絶対温度に対する 1 次式にフィットさせよ。

|                          |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|--------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| T / K                    | 880   | 890   | 900   | 910   | 920   | 930   | 940   | 950   | 960   | 970   | 980   | 990   | 1000  | 1010  | 1020  | 1030  | 1040  | 1050  | 1060  | 1070  |
| $\rho / \text{gcm}^{-3}$ | 1.504 | 1.500 | 1.495 | 1.491 | 1.486 | 1.482 | 1.477 | 1.473 | 1.469 | 1.464 | 1.460 | 1.455 | 1.451 | 1.446 | 1.442 | 1.437 | 1.433 | 1.428 | 1.424 | 1.419 |

```
IF(I.EQ.1) DD=D      Δ0
IF(I.EQ.2) DD0=D     Δ1
IF(I.EQ.3) DD1=D     Δ2
IF(I.EQ.4) DD2=D     Δ3
IF(I.EQ.5) DD3=D     Δ3
```

```
300 CONTINUE
```

C

```
A0=DD0/DD
A1=DD1/DD
A2=DD2/DD
A3=DD3/DD
```

```
WRITE(6,301) A0,A1,A2,A3
```

```
301 FORMAT(2X,'A0='E12.5,1X,'A1=' ,E12.5,1X,'A2=' ,E12.5,1X,'A3=' ,E12.5)
```

```
CLOSE(1)
```

```
END
```

=====

※問題 3 7

次表のデータを用いて、次の多項式の係数  $a$ ,  $b$ ,  $c$ ,  $d$  を求めよ。

$$y(x) = a + bx + cx^2 + dx^3$$

【答】  $y(x) = -0.0001 + 1.0044x - 0.0197x^2 + 0.1904x^3$

|     |     |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |
|-----|-----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| $x$ | 0.0 | 0.1    | 0.2    | 0.3    | 0.4    | 0.5    | 0.6    | 0.7    | 0.8    | 0.9    | 1.0    |
| $y$ | 0.0 | 0.1002 | 0.2013 | 0.3045 | 0.4108 | 0.5211 | 0.6367 | 0.7586 | 0.8881 | 1.0265 | 1.1752 |

※問題 3 8

次表のデータを用いて、次の多項式の係数  $a$ ,  $b$  を求めよ。

$$\log y(x) = a + b/x$$

る。(ヒント:  $z = \log y$ ,  $u = 1/x$  とおくと、この式は、  
 $z = a + bu$  となり、1次関数へのフィッティングの問題に帰着する。このようなフィッティングの操作が、片対数の方眼紙に  $(\log y_i, 1/x_i)$  のデータをプロットしたときに直線をひく操作に対応していることを理解せよ。

|     |       |      |      |      |      |
|-----|-------|------|------|------|------|
| $x$ | 1.0   | 2.0  | 3.0  | 4.0  | 5.0  |
| $y$ | 15.76 | 6.99 | 5.61 | 4.70 | 4.27 |

※問題 3 9

熔融塩化リチウムの粘度を測定したところ、次表のようなデータが得られた。これをアレニウス式

$$\eta = \eta_0 e^{E/RT} \quad \left( \begin{array}{l} R: \text{気体定数 } 8.31 \text{ JK}^{-1}\text{mol}^{-1} \\ T: \text{絶対温度 K} \end{array} \right)$$

にフィットさせ、 $\eta_0$  と  $E$  を求めよ。(ヒント: アレニウス式の両辺の対数をとれば、問題 3 8 に帰着する。) 2つのパラメーターはどのような物理的意味をもっているか。

|  |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
|--|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| $T/K$                                  | 830 | 840 | 850 | 860 | 870 | 880 | 890 | 900 | 910 | 920 | 930  | 940  | 950  | 960  | 970  | 980  | 990  | 1000 | 1010 | 1020 | 1030 | 1040 | 1050 | 1060 | 1070 |
| $\eta/10^{-3} \text{ Pa}\cdot\text{s}$ |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     | 1.40 | 1.35 | 1.30 | 1.25 | 1.21 | 1.17 | 1.13 | 1.10 | 1.06 | 1.03 | 1.00 | 0.97 | 0.94 | 0.92 |      |

※問題 4 0 (=バーロー：物理化学(下) 18.16)

反応式  $2\text{NO}_2 \rightarrow 2\text{NO} + \text{O}_2$  に従う二酸化窒素の分解はある条件の下で次の速度式に従う。

$$\text{速度} = k [\text{NO}_2]^2$$

温度の関数として  $k$  の値が次のように報告されている。アレニウス式  $k = A e^{-E_a/RT}$  のパラメーターの値を求めよ。

| T/K                                | 592   | 603.2 | 627   | 651.5 | 656   |
|------------------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| $k/\text{l mol}^{-1}\text{s}^{-1}$ | 0.522 | 0.755 | 1.700 | 4.020 | 5.030 |

※問題 4 1

銀の定容熱容量を測定したところ、次表のようなデータが得られた (バーロー：物理化学(上) p. 125)。これを

$$C_V = \alpha T^3$$

$$C_V = \alpha T^3 + \gamma T$$

の2つの式にフィットせよ (ある次数の項  $a_i$  が無いとき、解くべき連立1次方程式はどのようなものであるかをまず考えよ)。大抵の温度で一致は非常によいが、非常に低温では前者の式では大きな食い違いが生じることを確かめよ。Tの1乗と3乗の項はそれぞれどのような物理的意味をもっているか。

表 4.6 銀の定容熱容量†

| T/K  | $C_{m,v}/\text{J K}^{-1}\text{mol}^{-1}$ | T/K   | $C_{m,v}/\text{J K}^{-1}\text{mol}^{-1}$ | T/K    | $C_{m,v}/\text{J K}^{-1}\text{mol}^{-1}$ |
|------|--|-------|--|--------|--|
| 1.35 | 0.00106                                  | 12    | 0.347                                    | 74.56  | 16.90                                    |
| 2    | 0.00262                                  | 14    | 0.559                                    | 83.91  | 18.10                                    |
| 3    | 0.00657                                  | 16    | 0.845                                    | 103.14 | 20.07                                    |
| 4    | 0.0127                                   | 20    | 1.671                                    | 124.20 | 21.27                                    |
| 5    | 0.0213                                   | 28.56 | 4.297                                    | 144.38 | 22.48                                    |
| 6    | 0.0373                                   | 36.16 | 7.088                                    | 166.78 | 22.86                                    |
| 7    | 0.0632                                   | 47.09 | 10.80                                    | 190.17 | 23.34                                    |
| 10   | 0.199                                    | 65.19 | 15.37                                    |        |  |

† C. Kittel, "Introduction to Solid State Physics," Wiley, New York (1953).



関数  $f(x)$  の点  $x$  での微係数を計算することを考える。Taylor 級数より次のようになる。

$$f(\bar{x}+h) = f(\bar{x}) + hf'(\bar{x}) + \frac{h^2}{2!} f''(\bar{x}) + \frac{h^3}{3!} f'''(\bar{x}) + \dots \quad (1)$$

$$f(\bar{x}-h) = f(\bar{x}) - hf'(\bar{x}) + \frac{h^2}{2!} f''(\bar{x}) - \frac{h^3}{3!} f'''(\bar{x}) + \dots \quad (2)$$

(1) 式から (2) 式を引き、 $2h$  で割ると次式を得る。

$$f'(\bar{x}) = \frac{f(\bar{x}+h) - f(\bar{x}-h)}{2h} - \sum_{j=1}^{\infty} \frac{f^{(2j+1)}(\bar{x})}{(2j+1)!} h^{2j} \quad (3)$$

同様にして次式が得られる。

$$f''(\bar{x}) = \frac{f(\bar{x}+h) - 2f(\bar{x}) + f(\bar{x}-h)}{h^2} - \sum_{j=1}^{\infty} \frac{f^{(2j+2)}(\bar{x})}{(2j+2)!} h^{2j} \quad (4)$$

この結果、もし  $h$  が十分に小さければ  $f'(x)$  は次式で近似できる。

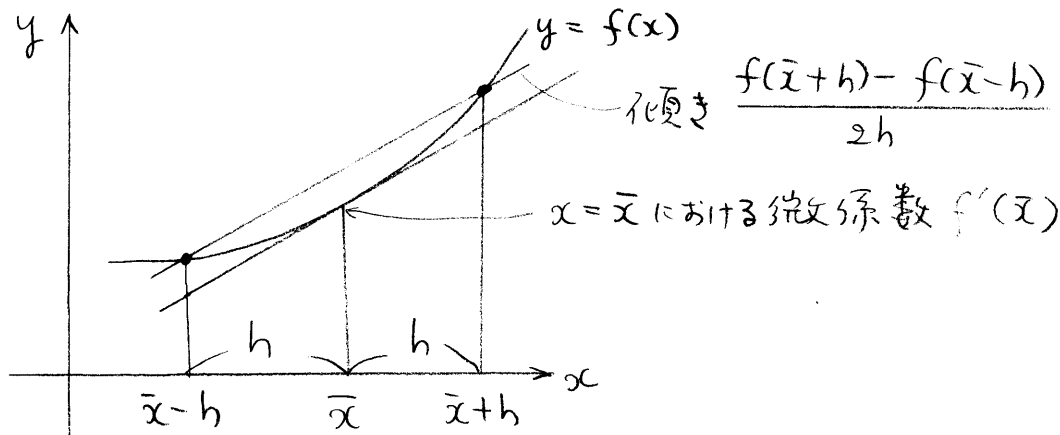
$$f'(\bar{x}) = \frac{f(\bar{x}+h) - f(\bar{x}-h)}{2h} \quad (5)$$

また、 $f''(x)$  は次のように近似できる。

$$f''(\bar{x}) = \frac{f(\bar{x}+h) - 2f(\bar{x}) + f(\bar{x}-h)}{h^2} \quad (6)$$

より高次の導関数に対する公式も全く同様に導くことができる。

直感的には、(5) 式は、下図の様なことである。



(5) 式の微分の誤差は (3) 式より明らかに  $h^2$  のオーダーである。もし、 $f'(x)$  を (5) 式ではなく (1) 式から直接得られる近似、

$$f'(\bar{x}) = \frac{f(\bar{x}+h) - f(\bar{x})}{h} - \sum_{j=1}^{\infty} \frac{f^{(j+1)}(\bar{x})}{(j+1)!} h^j$$

を使うと誤差は  $h$  の 1 次のオーダーとなり、精度が下がることに注意しよう。

$f(x)$  の  $x$  での 1 次および 2 次導関数の近似は、 $h$  の値 (正值) を小さく取れば、どれだけでも精度がよくなりそうである。数学の上ではそうなのだが、実際に数値計算をさせてみるとそうはならない (あまり  $h$  を小さく取りすぎるとかえって精度が落ちる)。つまり、もし、 $h$  の大きさが大変小さくなれば、(5) 式の分子の 2 つの項  $f(x+h)$  と  $f(x-h)$  はほとんど等しくなり、その差は小さくなる。すると有効数字の桁数が減ってしまう (こういう現象を桁落ちという。例えば、 $y_1 = 1.00002$  (有効数字 6 桁) と  $y_2 = 0.99998$  (5 桁) の差は、 $y_1 - y_2 = 0.00004$  で、有効数字 1 桁となる)。また  $h$  が小さいので分母の  $2h$  も小さくなり、結局 (5) 式は 2 つの小さい数の商となる。このような場合、誤差は大きくなる。

従って、 $h$  は限りなく 0 に近づければよいというものでもなく、ある程度の大きさを持っていることが必要である (問題 4 2 参照)。

$h$  を小さくしても望む精度の答えが得られないならば、次の方法を用いるとよい。(3) 式を  $h^4$  の項まで展開すると、

$$f'(\bar{x}) = \frac{f(\bar{x}+h) - f(\bar{x}-h)}{2h} - \frac{h^2}{6} f^{(3)}(\bar{x}) - \frac{h^4}{120} f^{(5)}(\bar{x}) + \dots \quad (7)$$

となる。いま、 $r$  を  $\pm 1$  以外の値とし、 $h$  を  $rh$  により置き換えると  $f'(x)$  の別の推定式が次のように得られる。

$$f'(\bar{x}) = \frac{f(\bar{x}+rh) - f(\bar{x}-rh)}{2rh} - \frac{r^2 h^2}{6} f^{(3)}(\bar{x}) - \frac{r^4 h^4}{120} f^{(5)}(\bar{x}) + \dots \quad (8)$$

(7)、(8) 式から、 $h^2 f^{(3)}(x) / 6$  の項を消去すると次のようになる。

$$f(\bar{x}) = \frac{1}{2hr(r^2-1)} [r^3 f(\bar{x}+h) - f(\bar{x}+rh) - r^3 f(\bar{x}-h) + f(\bar{x}-rh)] + \frac{r^4 h^4}{120} f^{(5)}(\bar{x}) + \dots \quad (9)$$

この式は、 $h^2$  でなく  $h^4$  のオーダーまで  $f'(x)$  を正しく表している ( (5) 式より精度が上がった ) ! より多くの関数値に対してこの方法を繰り返し用いれば、誤差を表す展開項からさらに高次の項を取り除くことができる。このようにして、誤差が  $h^6$ ,  $h^8$ , ... のオーダーである近似式を導くこともできる。

$r$ の値として最も一般的に用いられるのは $r = 1/2$ であり、この場合、(9)式は次の形となる(4点微分法)。

$$f'(\bar{x}) = -\frac{1}{6h} [f(\bar{x}+h) - 8f(\bar{x}+h/2) - f(\bar{x}-h) + 8f(\bar{x}-h/2)] + \frac{h^4}{480} f^{(5)}(\bar{x}) + \dots \quad (10)$$

このような方法は、離散データの微分(つまり、 $f(x)$ の解析形は不明だがある $x$ の値に対する $f(x)$ の関数値はいくつか与えられている場合)を求めるときにも使え、便利である。この場合は、(9)式に $r = 2$ を代入すると次式になる。

$$f'(\bar{x}) = \frac{1}{12h} [f(\bar{x}-2h) - 8f(\bar{x}-h) + 8f(\bar{x}+h) - f(\bar{x}+2h)] + \frac{4h^4}{120} f^{(5)}(\bar{x}) + \dots \quad (11)$$

さらに近似の精度のよい6点微分法の式は、

$$f'(\bar{x}) = \frac{1}{60h} [45(f(\bar{x}+h) - f(\bar{x}-h)) - 9(f(\bar{x}+2h) - f(\bar{x}-2h)) + (f(\bar{x}+3h) - f(\bar{x}-3h))] \quad (12)$$

である。

#### ※問題 4 2

点 $x = 1$ での $f(x) = e^x$ の1次微係数の近似値を、 $h$ を0.10から0.01ずつ小さくしながら数値微分によって求めよ( $h$ と $f'(1)$ を出力させよ。微係数はもちろん(5)式を使って計算すること)。得られた近似値を厳密値と比較し、 $h$ の最適値を見いだせ(プログラム名 MON42.FOR)。

ちなみに、プログラム冒頭の「IMPLICIT REAL\*8 (...)」(倍精度宣言)を、「... REAL\*4 (...)」に替えて単精度で計算させると誤差はどのくらい大きくなるか試してみよ(単精度で計算するのはこれ限りにせよ)。

#### ※問題 4 3

問題 4 2 の1次微係数を、(10)式の4点微分法を使って求めよ。問題 4 2 と同様に厳密値と比較せよ。問題 4 2 の2点微分法より精度が上がったか?(プログラム名 MON43.FOR)

#### ※問題 4 4

下表のデータに対して、(11)式を適用して $f'(0.5)$ を推定せよ。厳密値および2点微分法の近似値と比較せよ。(プログラム名 MON44.FOR)

((11)式から微係数が求められるのは $x = 0.5$ のときのみであり、 $f'(-0.5)$ などを求めるためには、補間法を使わなければならない。補間法については成書を参照の

こと。)

表:  $f(x)$  の数値

| $x$  | $f(x) = e^x$ |
|------|--------------|
| -0.5 | 0.6065       |
| 0.0  | 1.0000       |
| 0.5  | 1.6487       |
| 1.0  | 2.7183       |
| 1.5  | 4.4817       |

※問題 4 5

$f(x) = x e^x$  の  $x = 1$  における 1 次微係数、2 次微係数を数値微分により求め、厳密値と比較せよ。h を適当な大きさにとることによって誤差を 0.1% 以内に収めることができるか。(プログラム名 MON45.FOR)

※問題 4 6

2 変数関数の数値 2 次微分はどのようにすればよいかを考えてみよ。

関数  $y = f(x)$  の定積分

$$I = \int_a^b f(x) dx \quad (13)$$

は、原始関数  $F(x)$  がわからなくても数値積分によって求めることができる。(当然の話だが、不定積分を求めることはできない。)

任意の関数  $f(x)$  の区間  $a$  から  $b$  までのグラフを描くことができ、関数はこの区間でたちがよい(有限・一価・連続で、特異点を持たない)と仮定する。 $a = x_0, b = x_n$  とし、 $x_i = x_0 + ih$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) となるように、区間  $[a, b]$  を等しい間隔  $h$  ( $= (b - a) / n$ ) をもつ  $n$  個の部分区間に分けよう。

このとき積分は次のように書ける。

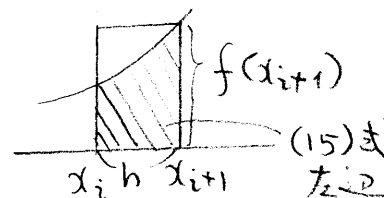
$$\begin{aligned} I &= \int_a^b f(x) dx = \int_{x_0}^{x_n} f(x) dx \\ &= \int_{x_0}^{x_1} f(x) dx + \int_{x_1}^{x_2} f(x) dx + \dots + \int_{x_{n-1}}^{x_n} f(x) dx \quad (14) \end{aligned}$$

(14) 式各積分を、部分区間の境界の点での関数値で近似する、つまり、

$$\int_{x_i}^{x_{i+1}} f(x) dx \simeq h f(x_{i+1}) \quad (15)$$

と近似する。ここで、 $f_i = f(x_i)$  である。すると定積分は

$$\begin{aligned} I &= h f(x_1) + h f(x_2) + \dots + h f(x_n) \\ &= \sum_{i=1}^n f(x_i) \cdot h \quad (16) \end{aligned}$$



部分区間の数を増やすにつれ、近似による誤差が減少することがわかるであろう。この最も単純な形の求積法を矩形則による積分という。(左辺の「ウナギのしっぽ」 $\rightarrow \int$ ,  $dx \rightarrow \Delta x$  に替えた式そのものだ!) ( $\Delta x \equiv h$ )

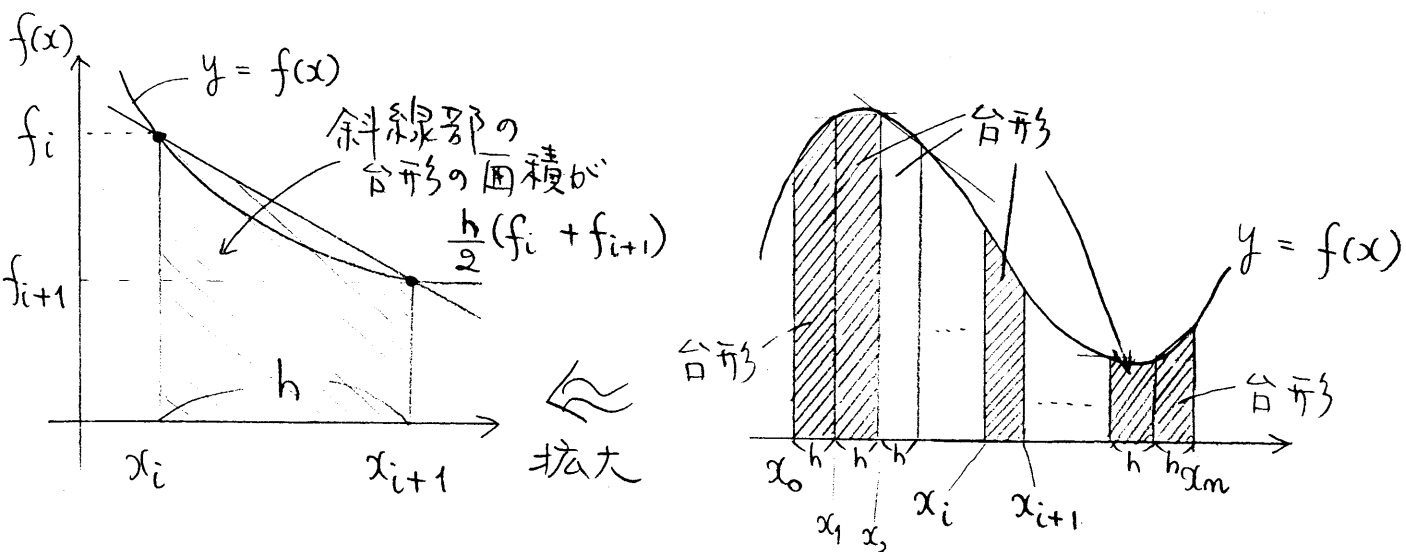
しかし、(14) 式各積分を、(15) のように近似するのではなく、各部分区間の関数値の平均で近似した方が正確であることは容易にわかる。つまり、

$$\int_{x_i}^{x_{i+1}} f(x) dx \simeq \frac{h}{2} (f_i + f_{i+1}) \quad (17)$$

とすれば、積分は、

$$\begin{aligned}
 I &= \int_a^b f(x) dx \simeq \frac{h}{2} (f_0 + f_1) + \frac{h}{2} (f_1 + f_2) + \dots + \frac{h}{2} (f_{m-1} + f_m) \\
 &= \frac{h}{2} (f_0 + 2f_1 + 2f_2 + \dots + 2f_{m-1} + f_m) \\
 &= \frac{h}{2} (f(x_0) + 2 \sum_{i=1}^{m-1} f(x_i) + f(x_m)) \quad (18)
 \end{aligned}$$

となる。この方法を台形則という（次図参照）。



台形則では、それぞれの部分空間のおおいを求めるために、2点で直線が決まるということを利用した。近似を改善するために、今度は区間  $[a, b]$  を偶数個の部分区間に分割し、部分区間をおおうのに、直線ではなく連続した3点を通る放物線で近似する。すると近似の精度はさらに向上し、積分は、

$$\begin{aligned}
 I = \int_{x_0}^{x_m} f(x) dx \simeq & \frac{h}{3} (f_0 + 4f_1 + 2f_2 + 4f_3 + 2f_4 \\
 & + \dots + 2f_{m-2} + 4f_{m-1} + f_m) \quad (19)
 \end{aligned}$$

で与えられる。この方法は Simpson の方法と呼ばれる（詳細は成書参照）。

※問題 47

半径 1 の円の面積を、

$$I = 4 \int_0^1 \sqrt{1-x^2} dx$$

の数値積分によって求めよ（台形則（18）式を使え）。積分区間は 10, 20, 50, 100 等分して積分を実行し、それぞれ得られた値を厳密値  $\pi$  と比較せよ。（プログラム名 MON47.FOR）

※問題 4 8

台形則を使って、積分

$$I = \int_1^2 \frac{1}{x^2} dx$$

を  $h = 1.0, 0.5, 0.25$  について計算せよ。(プログラム名 MON48.FOR)

※問題 4 9

次の積分を台形則または Simpson の方法を使って評価せよ。  $h$  の大きさを  $\pi/10$  から  $\pi/100$  までのいろいろな値にかえてみよ。厳密値と比較せよ。(プログラム名 MON49.FOR)

$$I = \int_0^{\pi} x \sin x dx$$

※問題 5 0

次の積分を評価せよ。

- (1) 解析的に求めよ。
- (2) 数値的に求めよ。無限大までの積分は、十分大きな  $x$  (ここでは被積分関数の値が十分ゼロに近くなる) までの積分で近似すること。(1) で求めた厳密値と比較せよ。

$$I_1 = \int_0^{\infty} e^{-ax^2} dx$$

$$I_2 = \int_0^{\infty} x^2 e^{-ax^2} dx$$

$$I_3 = \int_0^{\infty} x^3 e^{-ax^2} dx$$

(2) の場合は  $a=2$  として求めよ。

※問題 5 1

気体原子に対する Maxwell-Boltzmann の速度分布関数は、

$$F(v) = 4\pi v^2 \left( \frac{m}{2\pi k_B T} \right)^{\frac{3}{2}} e^{-\frac{m}{2k_B T} v^2} \quad (0 \leq v < \infty)$$

である。ここで、 $k_B$  はボルツマン定数、 $k_B = 1.381 \times 10^{-23} \text{ J K}^{-1}$  である。この分布関数は規格化されているか。解析的および数値的に調べよ(数値的に求めるとき原子はアルゴン  $m = 39.95 \text{ g mol}^{-1}$ , 温度は  $T = 300 \text{ K}$  とせよ)。気体原子の速度がこの分布に従うとき、気体原子のもつ運動エネルギー  $mv^2/2$  の平均値を解析的および数値的に求めよ。得られた結果はエネルギーの等分配則の一例である。

※問題 5 2 (=バーロー「物理化学」問題 6. 1 9)

温度  $T_1$ ,  $T_2$  のときの物質のエントロピーを  $S_1$ ,  $S_2$  とすると、

$$S_2 = S_1 + \int_{T_1}^{T_2} \frac{C_p(T)}{T} dT$$

なる関係式が成り立つ。数値積分によって、300 K における金属の銀の(絶対)エントロピーを、次表の 1 mol あたりの熱容量データから計算せよ。温度  $T$  が絶対零度に近づくとき、熱容量は  $T^3$  に比例して変化する。また絶対零度では熱容量  $C_p = 0$  と仮定せよ。

表

| $T/K$ | $C_p/JK^{-1}$ | $T/K$ | $C_p/JK^{-1}$ | $T/K$ | $C_p/JK^{-1}$ | $T/K$ | $C_p/JK^{-1}$ |
|-------|---------------|-------|---------------|-------|---------------|-------|---------------|
| 15    | 0.67          | 90    | 19.13         | 170   | 23.61         | 250   | 25.03         |
| 30    | 4.77          | 110   | 20.96         | 190   | 24.09         | 270   | 25.31         |
| 50    | 11.65         | 130   | 22.13         | 210   | 24.42         | 290   | 25.44         |
| 70    | 16.33         | 150   | 22.97         | 230   | 24.73         | 300   | 25.50         |

※問題 5 3

2重積分の数値積分はどのようにすればよいかを考えてみよ。

§ 7-2 (c) モンテカルロ法による数値積分

§ 5 の問題 2 7、および解答例を参照。モンテカルロ法は乱数を多数回発生させることにより、定積分を確率的に求める方法である。とくに被積分関数の形が複雑な場合や多重積分に対して有効である。

※問題 5 4

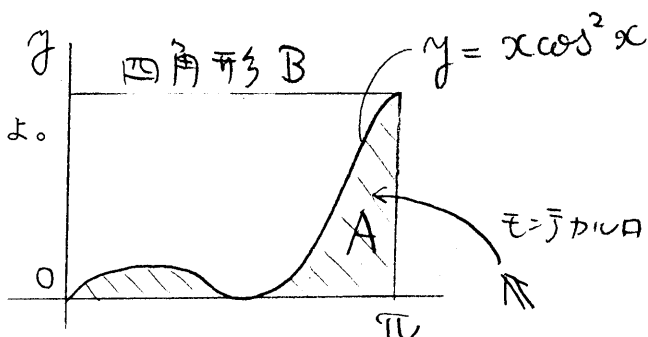
積分

$$I = \int_0^{\pi} x \cos^2 kx dx \quad (k \text{ は自然数})$$

を台形則、Simpsonの方法、モンテカルロ法の3つの方法で求めよ。その際、積分区間の分割数  $n$  と、被積分関数の中の  $k$  の値を変化させ、それぞれの近似値を厳密値と比較せよ ( $k=1$  で  $n=10, 20, 30$  のとき、および、 $k=20$  で  $n=20$  の場合を調べよ)。  $k=20, n=20$  のときはモンテカルロ法以外の方法は役に立たないことを見よ (分割幅に比べて関数の振動が激しいときには台形則、Simpson則は不向き)。

※問題 5 5

2重積分をモンテカルロ法で求める方法を考えてみよ。





## I. 数値微分

## ① 2点微分法

$$f'(\bar{x}) = \frac{f(\bar{x}+h) - f(\bar{x}-h)}{2h}$$

## ② 4点微分法

$$f'(\bar{x}) = \frac{1}{12h} [f(\bar{x}-2h) - 8f(\bar{x}-h) + 8f(\bar{x}+h) - f(\bar{x}+2h)]$$

## ③ 6点微分法

$$f'(\bar{x}) = \frac{1}{60h} [45(f(\bar{x}+h) - f(\bar{x}-h)) - 9(f(\bar{x}+2h) - f(\bar{x}-2h)) \\ + (f(\bar{x}+3h) - f(\bar{x}-3h))] ]$$

## II. 数値積分

$$I = \int_a^b f(x) dx \quad a = x_0, b = x_n, \\ x_i = x_0 + ih \quad (i = 0, 1, 2, \dots, n), \\ h = \frac{1}{n} (b - a)$$

## ① 矩形則

$$I = \sum_{i=1}^m f(x_i) \cdot h$$

## ② 台形則

$$I = \frac{h}{2} [f(x_0) + 2 \sum_{i=1}^{m-1} f(x_i) + f(x_n)]$$

## ③ Simpsonの方法

$$I = \frac{h}{3} [f(x_0) + 4f(x_1) + 2f(x_2) + 4f(x_3) + 2f(x_4) \\ + \dots + 2f(x_{n-2}) + 4f(x_{n-1}) + f(x_n)]$$

方程式と一口に言っても、非線型代数方程式、線型代数方程式（連立1次方程式）、（常・偏）微分方程式などがあるが、ここでとりあげるのは、非線型の代数方程式の解を求める問題である。他の種類の方程式を解く方法は数値計算法の成書を参照されたい。

しばしば見受けられる問題に、式

$$f(x) = 0$$

の根  $\alpha$ 、つまり関数  $f(x)$  の0点を求めるものがある。例えば、関数  $f(x)$  の最大値を見つける場合、最大値のところで満足される必要条件として関数  $F(x)$  の導関数が0となることがある。実際、この条件は最大値を決定するために用いられる。

方程式  $f(x) = 0$  の根を求めるためには次のような反復計算をすればよい。

$x_n$  を真の解  $\alpha$  に対する近似解とする。このとき、Taylor 級数を用いれば、 $f(\alpha)$  は点  $x_n$  のまわりに展開できて、次のようになる。

$$f(\alpha) = f(x_n) + (\alpha - x_n)f'(x_n) + \frac{(\alpha - x_n)^2}{2!}f''(x_n) + \dots \quad (1)$$

$x_n$  の値が  $\alpha$  に近いならば  $(\alpha - x_n)$  の値は小さく、 $(\alpha - x_n)^2$  およびそれ以上のオーダーの項は無視できる。従って、

$$f(\alpha) \simeq f(x_n) + (\alpha - x_n)f'(x_n) \quad (2)$$

しかし、 $f(\alpha) = 0$  であるから、

$$f(x_n) + (\alpha - x_n)f'(x_n) \simeq 0 \quad (3)$$

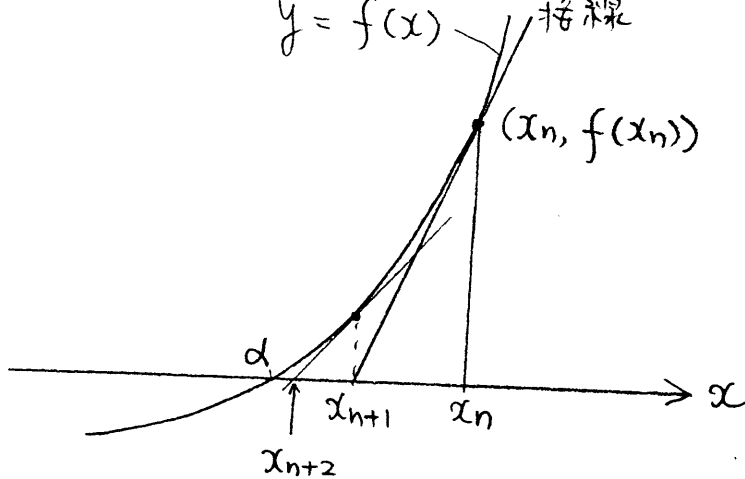
この関係から

$$\alpha \simeq x_n - \frac{f(x_n)}{f'(x_n)} \quad (4)$$

これは反復計算

$$x_{n+1} = x_n - \frac{f(x_n)}{f'(x_n)} \quad (5)$$

のもとになる式であり、Newton（またはNewton-Raphson）の反復法として知られている。この方法の幾何学的意味は次図に示す通りである。



曲線上の点

$(x_n, f(x_n))$  における接線と  $x$  軸との交点の座標を  $(x_{n+1}, 0)$  とすると、

$$f'(x_n) = - \frac{f(x_n)}{x_{n+1} - x_n} \quad (6)$$

すなわち、(5) 式となる。

反復による根の収束判定の条件としては、2つの近似根の差があるしきい値より小さくなったことをもって、十分正確な根がもともったとみなす。

$$|x_{n+1} - x_n| < \varepsilon \quad (7)$$

Newton法は一般に極めて速く収束するが、 $f(x)$  の導関数を知ることがまず必要である。場合によっては導関数の計算に長い時間が費やされたり（または、導関数を解析的に求めること自体が難しくプログラミングができなかったり）することがある。このようなときは、 $f(x)$  の導関数を2点  $(x_{n-1}, f(x_{n-1}))$ 、 $(x_n, f(x_n))$  を結ぶ線分の傾き、すなわち、

$$f'(x_n) \simeq \frac{f(x_n) - f(x_{n-1})}{x_n - x_{n-1}} \quad (8)$$

によって近似する。この関係を(5)式に代入すると、

$$x_{n+1} = x_n - \frac{x_n - x_{n-1}}{f(x_n) - f(x_{n-1})} f(x_n) \quad (9)$$

となる。導関数を用いる代わりに、(9)式によって反復計算を行なって根を求める方法は、セカント法と呼ばれている。Newton法での初期値  $x_0$ 、セカント法での初期値  $x_0, x_1$  はわれわれが適当に与えればよい。

#### ※問題 56

$f(x) = e^x - 3x = 0$  の根をNewton法で求めよ。初期値  $x_0 = 0$  とし、収束判定条件として2つの近似根間の差をとり、 $\varepsilon = 10^{-5}$  とせよ。初期値を別の値にして試してみよ。

【プログラム例：問題 56、Newton法】

PROGRAM MON56

IMPLICIT REAL\*8(A-H,O-Z),INTEGER\*4(I-N)

C INITIAL VALUE X0

READ(5,\*) X  $\dots x_0$

C

N=0

10 CONTINUE

FX=EXP(X)-3.0\*X  $\dots f(x_n) = e^{x_n} - 3x_n$

DFX=EXP(X)-3.0  $\dots f'(x_n) = e^{x_n} - 3$

C

DX=-FX/DFX  $\dots -\frac{f(x_n)}{f'(x_n)}$

N=N+1

X=X+DX  $\dots x_n - \frac{f(x_n)}{f'(x_n)} (= x_{n+1})$

WRITE(6,101) N,X,DFX,DX

101 FORMAT(3X,' N = ',I5,2X,' X = ',E12.5,2X,

\* ' DFX = ',E12.5,2X,' DX = ',E12.5)

IF(ABS(DX).GE.1.0E-5) GO TO 10  $\dots$  収束条件

C

WRITE(6,102) N,X

STOP

102 FORMAT(3X,' NUMBER OF ITERATION = ',I5,3X,' X = 'E12.5)

END

$$|x_{n+1} - x_n| < \epsilon$$

※問題 5 7

問題 5 6 の根をセカント法で求めよ。初期値  $x_0 = 0$ ,  $x_1 = 1$  とし、収束判定条件として 2 つの近似根間の差をとり、 $\epsilon = 10^{-5}$  とせよ。初期値を別の値にして試してみよ。

【プログラム例：問題 5 7、セカント法】

PROGRAM MON57

IMPLICIT REAL\*8(A-H,O-Z),INTEGER\*4(I-N)

C INITIAL VALUE X0,X1

READ(5,\*) XI,XF

C

N=0

10 CONTINUE

FXI=EXP(XI)-3.0\*XI  $\dots f(x_{n-1}) = e^{x_{n-1}} - 3x_{n-1}$

FXF=EXP(XF)-3.0\*XF  $\dots f(x_n) = e^{x_n} - 3x_n$

C

DFX=(FXF-FXI)/(XF-XI)  $\dots \frac{f(x_n) - f(x_{n-1})}{x_n - x_{n-1}}$

DX=-FXF/DFX  $\dots -\frac{x_n - x_{n-1}}{f(x_n) - f(x_{n-1})} f(x_n)$

N=N+1

繰り返し

XI=XF

XF=XF+DX

WRITE(6,101) N,XF,DFX,DX

101 FORMAT(3X,'N = ',I5,2X,'XF = ',E12.5,2X,

\* 'DFX = ',E12.5,2X,'DX = ',E12.5)

IF(ABS(DX).GE.1.0E-5) GO TO 10

--- 収束条件

C

WRITE(6,102) N,XF

STOP

102 FORMAT(3X,'NUMBER OF ITERATION = ',I5,3X,'X = 'E12.5)

END

$$|x_{n+1} - x_n| < \epsilon$$

※問題 5 8

$$f(x) = x e^x - 5 = 0$$

の解を Newton法を用いて小数点以下4桁まで求めよ。

※問題 5 9

$$f(x) = x^3 - x + 1 = 0$$

の解を Newton法を用いて小数点以下4桁まで求めよ。

※問題 6 0

$$f(x) = x^3 + x^2 - 1.0001x - 0.9999 = 0$$

のすべての解を Newton法を用いて小数点以下4桁まで求めよ。

※問題 6 1

$$f(x) = x^3 + x^2 - 1.0001x - 0.9999 = 0$$

のすべての解を Newton法を用いて小数点以下4桁まで求めよ。

※問題 6 2

$$f(x) = x \ln x - 1 = 0$$

の解を Newton法を用いて小数点以下4桁まで求めよ。

※問題 6 3

van der Waals 気体に対する状態方程式は

$$\left(P + \frac{am^2}{V^2}\right)(V - mb) = mRT$$

である。ここで、a, bは van der Waals 定数である。この式を変形して V についての3次式を書け。

この方程式を用いて、500Kで100気圧における窒素のモル体積を求めよ。窒素の van der Waals 定数は

$$a = 1.37 / \text{bar l}^2 \text{mol}^{-2}, \quad b = 0.0387 / \text{l mol}^{-1}$$

である (バーロー: 物理化学 (上) p. 44)。

※問題 64

298 Kにおけるメタンのビリアル型の状態方程式 (バーロー: 物理化学 (上) p. 19) :

$$\frac{PV_m}{RT} = 1 + \frac{B}{V_m} + \frac{C}{V_m^2} + \frac{D}{V_m^3}$$

$$V_m: \text{モル体積}$$

$$T = 298 (\text{K})$$

の係数は

$$B = -4.281 \times 10^{-2} / \text{l mol}^{-1}$$

$$C = 2.102 \times 10^{-3} / \text{l}^2 \text{mol}^{-2}$$

$$D = 1.5 \times 10^{-4} / \text{l}^3 \text{mol}^{-3}$$

である。1気圧のメタンのモル体積をこの式から求めよ。

$$(T = 298 \text{ K における})$$